

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	金丸 敏幸
論文題目	日常言語の意味拡張と主観性に関する認知言語学的分析 —用法基盤モデルの観点から—		

(論文内容の要旨)

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の意味の主観性と意味拡張のプロセスを分析した実証的研究である。全体は、5章から成る。

第1章では、認知言語学のパラダイムに基づく用法基盤モデルの視点から、これまでの理論言語学の研究の背景となっている文法研究の批判的な検討がなされる。

第2章では、日常言語の意味を特徴づける状況的意味と認知的意味の双方の観点から、動詞の多義性と意味の拡張のメカニズムを考察する。具体的には、認知言語学の意味ネットワークモデルの枠組みに基づき、日本語の動詞「つける」の多義性の分析を通して、語彙の多義性の構造を特徴づける状況的意味と認知的意味の連続性と違いについて考察する。これまでの理論言語学の意味分析では、主に真理条件に関わる状況的意味の分析は試みられているが、状況的意味と認知的意味の区分に基づく語彙の多義性の分析は等閑視されてきている。本章では、基本的に真理条件によって特徴づけられる状況的意味と話者の主観的な事態把握を反映する認知的意味を厳密に区分している。本章では、この区分に基づき、日常言語の動詞の多義構造を、事態把握の主観性から独立した状況的な意味の構造と話者の主観的な事態把握を反映する認知的な意味の構造の二つの側面から規定している。本章ではさらに、認知言語学のプロトタイプ理論に基づき、後者の主観的な事態把握を反映する認知的意味を、プロトタイプ的な意味(ないしは原型的な意味)とこの種の基本的な意味から拡張された派生的な意味とに区分し、両者の意味の分布関係を、多義性のネットワークモデルによって記述している。

第3章では、日常言語の事態把握の主観性を反映する言語表現のモダリティと言語表現の真理条件的な意味の一部を特徴づける命題の相互関係が考察の対象となっている。本章では、以上のモダリティと命題の相互関係の分析のための事例研究として、日本語の副詞の意味の主観性の問題が考察の中心となる。近年の副詞研究では、叙法副詞や陳述副詞を中心とする主にモダリティの側面を反映する副詞表現が分析の対象となってきたが、命題に関わるとされる状態副詞の研究は、本格的には考察の対象となっていない。また、後者のタイプの副詞研究においても、修飾成分としての副詞の要素と文のコアを成す命題成分の関係だけに注目しており、この種の副詞のモダリティの主観的な意味の側面(すなわち話者の事態把握に関する主観的な心的態度に関わる側面)は明らかにされていない。本章の前半では、特に状態副詞の意味を分析し、主体が事態の認識に積極的に関わることにより、本来は命題の真理条件に関わるはずの状態副詞が、話者の主観的な心的態度を表すことを明らかにしている。また、本章の後半では、以上の事実を検証するために、認知言語学の用法基盤モデルに基づき、副詞の使用による日常会話の意見文に関する言語データの分類精度の調査を試み

ている。この調査の具体的な手順としては、話者の心的態度を記した副詞辞書を構築し、この辞書を用いて意見文の分類実験を行っている。以上の言語データの分類精度の調査により、本来は命題の真理条件に関わるはずの状態副詞が、話者の主観的な心的態度を表す事実を検証している。

第4章では、コーパス言語学の統計的視点から、認知言語学の用法基盤モデルの言語処理分析に対して批判的な検討を加え、新たな提案を試みている。近年、言語の意味情報を電子言語資料として定式化する研究が進められている。自然言語処理の分野においても、言語の意味に関わる電子言語資料は特に重要視されており、意味の階層構造を記述した言語意味資源のバークレー・フレームネット (Berkeley Frame Net、以下BFNと略記)の分析が多く言語処理の研究分野で注目されている。しかし、各言語で意味フレーム情報を利用するには、BFNの提供する言語情報資源の規模や量では十分ではない。本章では、BFNを用いて日本語の意味フレームの記述を効率的に行えるかどうか、また実際に記述された意味フレームの内容が十分かどうかを検討している。そのため本章では次の二つのことを行っている。まずBFNと対訳コーパスを用いて日本語の意味フレームを効率的に構築するための方法を開発し、これを用いて実際にBFNの意味フレームから日本語の意味フレームの記述を試み、得られた意味フレームの記述内容と他の日本語の言語資源における記述の比較・検討を行っている。具体的な分析としては、日本語の動詞「襲う」のフレーム記述を試みている。この記述に際しては、「襲う」の意味のプロトタイプとその拡張的（ないしは派生的）意味の多義性に注目し、この多義構造にBFNの修正意味フレームを適用して、BFNの提供する動詞の意味的な情報資源の規模や量の限界を超える、より日常言語の多義構造の実際を反映する意味フレーム分析の代案を提出している。

第5章は、今後の展望と一般的考察に向けられ、以下の問題点を明らかにしている：(i) 本研究で扱った対象が動詞と副詞に限られており、名詞や形容詞といった他の言語カテゴリーにまで一般化して扱うことができるかどうかについては明らかではない。(ii) 特に、名詞の意味分析は今後新たな観点からの分析が必要とされており、本研究での分析方法が一般性を持つためにも、本論文で考察した動詞や副詞の語彙カテゴリーだけでなく、今後は特に名詞、形容詞を中心とした語彙カテゴリーに、意味フレームの分析を適用していく必要がある。(iii) 本研究では、統計的なコーパスを用いて幅広い言語データを対象にすることを前提にしているが、一般にコーパスがどの程度に日常言語の意味構造の实在性を反映しているかに関しては、言語の共時的な分析だけでなく、言語習得における意味獲得や歴史的な意味変化に関するデータに基づく検証が必要となる。以上、本章は、今後取り組むべき問題のうち、特に重要と考えられる意味研究の問題として (i)～(iii)の諸点を指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語に観察される様々な意味拡張と、この種の意味拡張を可能とする認知主体の主観性の役割について分析した実証的研究である。本論文の独創性は、特に認知言語学の用法基盤モデルの観点から、動詞、副詞、等の語彙カテゴリーのプロトタイプ事例と拡張事例の使用文脈について詳細な検討を行い、事態認知に関わる判断やそれに伴う感情といった認知主体の主観性が、言語表現の意味拡張と意味の創造性の基盤として重要な役割を担っている事実を明らかにしている点にある。

また、本論文は、以上の意味分析の基盤となる認知言語学の用法基盤モデルの記述・説明の妥当性に関し、従来のモデルの批判的検討を行っている。これまでの用法基盤モデルは、ボトムアップ的アプローチを目指しているが、本論文が試みているような、実際のコーパスを用いて大量の言語データを統計的に分析する試みはなされていない。実際、認知言語学の多くの研究では、用法基盤モデルを適用する対象は、その分析者の作例が中心となっている。こうした現状に対して、真に用法基盤モデルの立場から意味分析を行うのであれば、コーパスのような大規模言語データをも分析の対象として取り扱う必要がある。また、用法基盤モデルの実証的な方法論を確立するためには、本研究が試みている言語データの統計的な処理に基づく分析を進める必要がある。

また、これまでの用法基盤モデルは、実際の経験に基づいて言語が構築されたり拡張されるモデルであり、その分析の対象は、あくまでも言語事例の範囲に留まっている。しかし、実際の使用事例の発話状況を考えた場合、言語主体が経験し理解しているのは、発話された言語表現の意味だけではなく、発話の状況そのもの（ないしは事態そのもの）であると考えべきである。本論文の独創的な点は、以上の問題を考慮し、発話が志向する事態の言語外的な知識を意味フレームとして規定し、個々の発話や言語表現は、この種の知識の意味フレームが指示する事態のサブフレームとして規定している点にある。

本論文のフレーム規定に関する以上の研究をさらに進めていくなれば、用法基盤モデルが日常言語の意味分析としてモデル化する対象は、言語情報と事態に関する非言語情報を含む、より広範な知識のフレームとなるべきである。認知言語学の枠組みでは、フレーム規定の枠組みとしてFillmoreのフレーム意味論が提案されているが、用法基盤モデルにおける「用法」が実際の発話状況を示しているのであれば、本研究が検証しているように、より使用文脈に沿った視点からの意味分析が求められる。この点に、本論文の意義が認められる。

さらに本論文の独創的な点は、方法論的な精緻化がまだ十分とは言えない用法基盤モデルに対する実践的な方法論を具体的に示している点にある。認知言語学をはじめとする従来の意味研究では、分析者の直観に基づいて用例を作成し、同時に評価を行うという方法が採用されている。しかし、この方法は、科学的研究の方法としては問

題があると言わねばならない。こうした現状に対して、本研究は、実際の使用例に対し体系的・網羅的な事例収集と観察を行い、客観的な判断基準となる統計的な方法と指標を提示し、科学的な言語研究の方法論を提示している。この方法論は、言語現象の分析一般に適用可能であり、言語のメカニズムを検証する上で重要な意味を持つと言える。

言語学における記述と説明の妥当性の観点からみた場合、本研究は、次の点で従来の理論言語学における意味研究に比べ、より体系的な説明を可能にする。従来の研究では、動詞や副詞の語彙概念的な制約に基づく分析が大半を占め、この種の概念的な制約から説明できない現象に関しては、語用論的な要因にゆだねる例外処理の扱いをしている。これに対し、本研究では、言語主体の事態把握の主観的認知を反映する動詞と副詞の多義性のネットワークと意味フレームに基づき、この種の語彙カテゴリーの意味構造と語義の分布関係を、定量的な評価手法に基づいて体系的に分析している。認知言語学のパラダイムに代表される最近の用法基盤モデルの研究では、プロトタイプの基本的な意味とこの基本的な意味からの拡張によって創発する多様な語義の分布関係の解明が注目されている。以上の多義性のネットワークと意味フレームに基づく本研究の意味分析は、認知言語学の最近の用法基盤モデルに基づく語義の体系的規定に関する実証的な研究として重要な貢献を果たしている。また、以上の認知言語学のネットワークモデルに基づく基本的な意味と派生的な意味の相互関係の分析は、言語習得における語義の獲得過程の解明（特に、基本的な意味と派生的な意味の獲得順序の解明）の基礎研究としても重要な意味を持つと言える。

本研究は、主に日本語の現象を対象にし、共時的な視点からみた意味研究を主眼としており、日常言語の通時的な視点からの意味分析の適用はなされていない。しかし、本研究の共時的な視点からの意味研究を進めていくなれば、動詞や副詞の語彙レベルにおける意味の変容プロセスによって特徴づけられる通時的な意味変化の一面を、より体系的に分析していくことが可能となる。この点で、本研究は、日常言語の意味変化の背景となる記号の創発のメカニズムを一般的に解明していくための基礎研究としても注目される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の研究分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成22年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降